

「過去を直視する勇気」

1A 山梨県立大学 朝妻椿

今回の七日間の訪中を通じて、私は中国に対する考え方が大きく変化したと感じている。出発前の私は、中国という国に対してどこか漠然とした距離感や警戒心を持っていた。ニュースで目にする日中間の摩擦や政治的対立の影響もあり、中国は「近くて遠い国」という印象が強かった。しかし、現地で実際に人々と交流し、歴史や文化に触れるなかで、そのような固定観念が大きく揺らぎ、むしろ親近感と理解を深める契機となった。

特に印象的であったのは、中国の人々が私たち日本人に対してとても温かく接してくれたことである。円卓を囲んでの食事はその象徴的な場であった。中国では円卓を囲むことによって、食卓に上下関係が生まれにくく、料理を皆で分け合うことで連帯感や平等性が育まれる。日本では一人ずつ分けられた料理を食べるのが一般的であるため、最初は戸惑いもあったが、次第にその文化が「共に生きる」ことを大切にする中国人の価値観を映し出していると感じるようになった。最終日に現地の大学生と一緒に円卓を囲み、様々な話をした時間は年齢や国籍、住んでいる環境が全く違うのにもかかわらず心の距離を縮められたことで、温かい心遣いを感じた。

一方で、訪中には歴史について考える機会も多く与えられた。中国の人々との対話や施設見学を通じて、日本がかつて加害者であったという歴史的事実を改めて実感した。細菌戦など高校の世界史では習わなかったこと、大きく焦点を当てられてないことなどを学び、自分は偏った視点でしか見ていなかったことを実感した。日本が戦争や侵略の記憶は未だに中国社会に深く刻まれており、その痛みを無視しては真の友好関係は築けないことを学んだ。日本人として、自国の歴史に対する責任を認識し続けることは、隣国との信頼を回復し、未来志向の関係をつくるために不可欠であると強く思った。

その中で、日本、そして私自身は今後どのように中国と向き合っていくべきか。第一に、日本は過去の歴史を謙虚に振り返り、その事実から逃げない姿勢を保ち続けることが重要である。同時に、経済・環境・教育など共通の課題に協力して取り組むことで、未来に向けた信頼を少しずつ積み重ねていく必要がある。個人の立場からすれば、私は今回の経験を忘れず、偏見に基づく中国観ではなく、自分の目で見て、耳で聞き、心で感じた中国を周囲に伝えていくことが責務だと考えている。交流の輪を広げることが、国同士の橋渡しの一歩になるはずだ。

この七日間の訪中は、私の人生にとって大きな転機となった。異なる文化や歴史に触れ、自らの無知や偏見に気づき、それを乗り越える経験ができたことは、今後の生き方に大きな影響を与えるだろう。中国で学んだ「共に食卓を囲む心」「過去を直視する勇気」「隣人を理解しようとする姿勢」は、私にとって一生の財産である。この経験を通じて、私は日中関係をより良くしていく一助となるような生き方を目指したいと強く思う。

「大陸の薫風に抱かれて」

1A 津田塾大学 浅野煌美

五感を満たされたまま、私は今、筆を進めている。メトロノームが均等に、無味乾燥に時を刻むように、私のタイピングの音もまた部屋に響き渡る。だが、その一打ち一打ちには、七日間の記憶と有機的な感情が脈打っている。

羽田から飛び立ち、北京の大地に足を下ろした瞬間、重みを帯びた空気が頬を包み、土と緑が混ざり合った匂いが胸奥に広がった。ここは同じ空の下にありながらも、確かに異なるリズムで時を刻む大陸なのだと、その第一歩で悟らされる。初日の万里の長城に吹きすさぶ風は、単なる涼しさにとどまらなかった。石畳を踏みしめる私たちを見下ろすかのように、数千年を超えて吹き抜けてきた風は、そこに生きた人々の声や足跡を運んでいるように思えた。その風を受けると、軽い観光客としてではなく、歴史に触れる者としての自覚が自然と背筋を伸ばした。

翌日、歴史展覧館と故宮を巡った。壮麗な宮殿の回廊を歩き、展示物に目を凝らすたびに、国家というものは単なる制度や仕組みではなく、血肉を持った人々の選択と葛藤の積み重ねであることを知る。大理石の床に反射する光は、栄華と同時に影をも映し出し、そこに確かに人間の物語が宿っていると感じさせた。夜の晩餐会では、料理の香りと笑い声が渦を巻き、過去と現在、そして未来までもが同じ卓上に集う不思議な感覚に包まれた。

やがて飛行機で北へと進み、長春に降り立つ。ここは私にとって、この旅で最も鮮烈な印象を残した地である。街並みには歴史が息づき、同時に活気ある日常が織り込まれていた。乾いた空気が肌を刺すように感じられる一方で、それが逆に心地よく、肺を通り抜けるたびに清らかさを与えてくれた。とりわけ印象的だったのは、朝、目覚めの瞬間に胸の奥へずっと入り込んできた「朝涼」である。窓から差し込む光とともに、澄み切った冷たさが体を包み込み、心を鎮める。あの静謐な涼しさは、旅の中で得た最も繊細な贈り物であったように思う。東北民俗文化に触れたときの鮮やかな色彩も、乾いた空気の中でひときわ生き生きと浮かび上がり、都市そのものが呼吸しているように映った。

瀋陽では遼寧大学を訪れ、学生たちとの交流に心を動かされた。出身国は違えども、笑顔や仕草の中に流れる感情は普遍である。互いに抱える違いが、むしろ関係を深める糸口になる瞬間を、私は確かに目にした。街全体に溢れる活気には、ただ圧倒されるばかりだったが、それと同時に「これもまた大陸の一面にすぎない」という感覚が胸をよぎる。華やかな都市の背後には、まだ触れられていない物語が幾重にも折り重なっている。その多面性にこそ、この大陸の真の魅力があるのだと悟った。

市場や博物館、工業遺産に足を運ぶごとに、中国という大地が抱える「両義性」が姿を現した。古き伝統と未来への革新、記憶と進歩。それらが矛盾ではなく共存として成立している光景は、懐の深さと強靱さを同時に物語っていた。そこに立ち会ったとき、私はただ旅人である以上に、ひとりの証人として心に刻むべきものを見たように思う。

帰路についたとき、手にしていたのは観光名所の羅列ではなかった。万里の風の重み、故宮の静謐、学生たちの眼差し、そして胸に沁みたあの朝涼。それらが溶け合い、ひとつの大きな薫風となって、私を抱きしめている。

この七日間で受け取ったものは、記録の中に留めるにとどまらず、これからの日々を生きる私自身を導く灯火となるだろう。大陸の風は、確かに私の中で今も吹き続けている。

「未来に繋がる1週間」

1A 中央大学 上西なつめ

「今」の中国を自分の目で確かめたい。語学力を活かし、現地の人々と直接意見を交わしたい。この二つの思いが、今回私が訪中国に参加を希望した理由である。近年、中国に関する情報は日本にも多く伝えられているが、その多くは断片的であり、現地の生活や若者の考え方を実際に感じ取る機会は限られている。だからこそ、自分自身の足で中国を訪れ、肌で触れることによって本当の姿を知りたいと考えていた。

今回の訪中で最も強く印象に残ったのは、「九一八歴史博物館」である。今年は事件から80周年という節目の年にあたり、日本人としてその場に足を踏み入れることに不安を抱いていた。歴史をめぐる日中間の緊張を意識し、「日本人が訪れて良い場所なのか」「現地の人々にどう見られるのか」。実際に、老北市を訪れた際にはお店の人から「あなたたちは日本人か」と尋ねられ、「そうだ」と答えると、「日本人は来るな、帰ってくれ」と言われた。言葉の速さもあり正確には理解できなかったが、その一言に強い衝撃を受けた。歴史が残した傷の深さを、頭ではなく身体で感じた瞬間だった。中国の人々が今もなお歴史に対して敏感であり、戦争の記憶は決して過去のものとして片づけられてはいないのだ。日本で暮らしていると「戦争は遠い過去」と感じがちだが、隣国にとっては依然として現在進行形の問題であることを実感した。この体験を通じて私は、歴史と向き合う姿勢を一層真剣に考えねばならないと痛感した。

また、現地の学生との交流では、歴史と向き合う日常生活についても率直に語り合うことができた。中国語を実際に使いながら意見を交わす中で、共通点や相違点を実感し、自分の理解を深める大きな学びとなった。これは、想像以上の収穫だったと思う。

さらに、今回の訪中で欠かせない記憶となったのは、一緒に行動した班の仲間存在である。事前研修で顔を合わせたのは一度きりだったが、中国で過ごしたわずか一週間の間に、深い友情を築くことができた。全国各地から集まったメンバーは、それぞれ異なる視点や考え方を持っており、一つの出来事に対しても様々な角度から意見を交わすことができた。その議論を通じて、自分の視野が大きく広がったと感じる。訪問の終盤には「日本に帰りたくない」「もっと一緒にいたい」という思いが込み上げるほど、班の絆は強いものとなっていた。この出会いは他の何にも代えがたい一生の財産であり、今後も大切にしていきたいと心から思う。中国の歴史や文化を学べたことはもちろんだが、同じ日本の大学生との交流を通じて得た気づきも、私にとって非常に貴重な経験となった。

温かなもてなしを受けながら拝見した歴史・文化の一端、中国人学生との交流、そして今回出会った日本人学生との交流。今回の訪中国で得た経験は、単に異文化を知るだけではなく、自分自身の学習姿勢を見直すきっかけともなった。私はまだまだ知らないことだらけだ。もっと学び続けたい、という強いモチベーションも生まれた。今後は中国語の力をさらに磨き、中国の歴史や社会をより深く理解することで、互いの国をつなぐ架け橋となれるよう努力していきたい。大きな力を私に与えてくれた、かけがえのない1週間に感謝している。

「歴史認識と交流の重要性」

1A 天理大学 緒方七緒

今回の日中友好大学生訪中団 3 陣では、北京、長春、瀋陽の 3 つの都市を訪れた。それぞれの都市で博物館を見学し、伝統文化を体験し、地域の特色豊かな食事を味わうことができた。これまでに中国を訪れたことはあったが、今回も「初めて」の体験と新たな発見に満ちており、刺激的で新鮮な毎日を過ごすことができた。この 7 日間の日程の中で、特に印象に残ったことをまとめたい。

まず、戦後 80 周年を迎えた節目にあたり、日中間の戦争に関する博物館を見学できたことは大きな経験となった。高校の授業で、満州事変や柳条湖事件などについては学んではいたものの、実際に展示資料や写真を目にすることで、教科書には知り得なかった事実の多さを実感した。例えば、日本軍による細菌兵器の開発や人体実験など、非人道的な行為。また、侵略を受けた国でありながら日本孤人児を育ててくださった中国の人々の寛大さや、愛と平和への思い。相手を憎むのではなく、支え合い、助け合うという姿勢。どれも今回初めて知り、帰国後は必ず周りの人に伝えたいと強く感じた。

この経験から考えたことは、日本国内での歴史教育や報道において、中国との間で起きた軋轢の内容が少ないということだ。確かに痛ましく、衝撃的な出来事が多いが、これらの出来事は日本国民全員が認識し、後の世代に伝えていく必要がある。「歴史を学び、歴史に学ぶ」との言葉にあるように、歴史は先人たちが残した教訓であり、今後の私たちが進む道標になる。過去を振り返るためだけでなく、将来にわたって戦争を繰り返さないためにも、知る機会を増やし、意識するよう心掛けるべきだと思う。

さらに、今回の訪問では、現地の大学生との交流が大きな学びをもたらした。当初は「日本に関心が薄いのでは」「日本を好意的に見ていないのでは」といった先入観を持っていたが、実際には日本のアニメや音楽への関心が高く、日本語を熱心に学ぶ学生も多かった。会話を重ねる中で、中国の印象が徐々に変化していき、私自身の偏見を反省させられた。SNS や一部の報道によって生まれる固定概念が、いかに事実とかけ離れているのかを実感するとともに、直接の交流が相互理解を深めるうえで重要であることを学んだ。偏見や先入観は自身の視野を狭めるだけで、互いの溝が深くなるだけであり、自身の五感で感じたことを信じるべきである。また今回の交流を通じて感じたのは、胸襟を開いて語り合える友人関係の重要性である。大切な友達がいる国に対して、敵対的な行為を行うことは難しいだろう。例えば極端な話だが、友達がいる国に爆弾を落とすことはできないし、友達が悲しむ姿を見たくない。友人の存在は、相手の国が「遠い存在」ではなく、「身近な存在」として意識させることができる。このような関係性こそが、戦争を未然に防ぐ大きな力になると考える。

これらの経験から、平和構築のためには二つの要素が不可欠であると考えます。第一に、歴史教育の充実である。過去の事実を正確に学び、国民一人ひとりが戦争の悲惨さを認識することが、再発防止の基盤となる。歴史という教訓を忘れず、未来永劫戦争が起こらないように、社会を創っていく必要がある。第二に、市民レベルでの交流の拡大である。対話や共同活動を通じて相互理解を深めることは、両国の確執を減らし、関係を緩和するための力になる。現在は SNS などを通じて簡単に世界とつながることができる。このツールを活用すれば、今回築いた関係を一過性のものにせず、継続的に交流を続け、より親睦を深めることが

できる。

以上の通り、今回の日中友好大学生訪中団 3 陣では、単なる文化交流や観光にとどまらず、歴史認識と学生同士の交流の重要性を認識し、日中間の架け橋となることができた貴重な機会であった。今回得た経験と考察を今後の活動に生かし、日中の平和社会の実現に尽力していきたい。

「歴史と日本の教科書検定制度」

1 A 北海道大学 尾倉 碧

今回の日中友好大学生訪中団第3陣では、北京や長春、瀋陽を訪れた。そして、私たちは様々な博物館や観光名所を見学し、食事を堪能することができた。その中でも、私が印象に残っているのは、歴史の見方を改めて考えさせられたことである。特に今回の訪中では、日中戦争について特に深く学ぶことができたため、日中戦争について記しておく。

私たち日本人は、小学校から高等学校までの社会科ないし日本史・世界史の授業で日中戦争について学ぶことができる。私たちが習ってきた日中戦争の概要は、日本軍が勝手に侵攻して満州国を建国した。そして、盧溝橋事件がきっかけとなって日中戦争が発生した。日本軍は中国の都を陥落させるほどの勢力で侵攻を続けたが、太平洋戦争の勃発などにより、結局敗戦となった、ということである。

確かに、この概要は間違っていない。歴史の流れを伝えたり、受験勉強をしたりする上で必要最小限のことは抑えている。

しかし、私が今回の訪中を踏まえて考えたのは、日本の教育機関がこの必要最小限の歴史を伝えるだけでいいのか、ということである。

日本の教科書は文部科学省の検定を経たうえでそれに合格したもののみ、学校の教科書として使用できる。この教科書検定制度が憲法上で禁止されている「検閲」にあたるか、は議論のあるところであるが、それは置いておいても、この制度や現在の教育には問題があると思った。なぜなら、日本の教科書には日本がどのような残酷なことをしたのかを述べているのはごくわずかだからである。

今回、博物館をたくさん回ったが、その中でも、抗日派の人々の生首が転がっている写真を見て大変衝撃を受けた。日本がここまで残酷なことをしていたことを知らなかったし、学んでいないからである。これをみた瞬間に、この写真は日本に持ち帰らなければならないと思って、反射的に写真に収めたくらい、私にとっては衝撃的なものであった。

また、生物兵器を日本軍が使っていた話など、私の記憶の中には皆無であった。しかし、博物館で、日本軍が施設で実験をしていた話などを聞いて、日本の教育とはそこまでも恣意的なものであったのかとすごく考えさせられた。

今回の訪中を通して、私は、多角的に物事を見ることの大切さを学んだ。歴史を見る時、日本から語られる歴史は、日本の視点で描かれることが多いし、第二次世界大戦においては、日本はアメリカによって原子爆弾の被害を受けたことしか特に強調されない。日本が中国人に対してどのような残酷なことを行ってきたのかという視点を忘れてしまっているし、それが語られることは、日本の義務教育ないし高等学校ではない。

確かに、小中学生に歴史を伝える上ではこの情報というのは衝撃的過ぎてふさわしくないのかもしれない。

しかし、高等学校でもこれを教えない理由はあるのだろうか。

高校生は、ある程度の思慮分別を備えており、批判的に物事を見る視点というのも身につけ始めているはずである。そうであるならば、高等学校でこそ日本が行ってきた戦争とはどのようなものであったかを教えるべきであると考え。大学に入ってから専門的に学問を究めることになるため、ふさわしい場所というのは高等学校であろう。

私たちは小学校のころから歴史を学ぶ時に必ず日本の視点から物事を見る。しかし、教科書に載っていることだけが真実ではない。教科書検定制度の影響を受けて、忘れられたか、あえてそぎ落とされた情報というものが必ず存在する。そのことを知らずに生活すると、いつか国際交流をした時に齟齬がおこる。その結果、国同士の争いにつながっているのかもしれない。

このことはあくまでも仮説にすぎないのかもしれないが、日本と中国がお互いに仲良く付き合っていくには、私たちはこのような物事を多角的にみるという歴史観というのを忘れてはならない。ひいては、この考え方は学問や生活の様々なことに応用でき、使うべき武器となるだろう。

私は将来、国際的な案件を扱う弁護士になる可能性が少なからずある。その時には物事を多角的に見るという視点を忘れずに、大切にして仕事をしていきたいと考えている。

「訪中で得たものと今後について」

1 A 青森中央学院大学 佐藤千華

今回、公益社団法人日本中国友好協会（日中友好協会）の大学生訪中団第3陣の団員として参加することになりました。私にとって、初海外であり、初飛行でもあったため、不安と好奇心で胸がいっぱいでした。一週間という期間は今思うと長いようで短い期間だったと感じました。この短期間で中国の歴史や文化をたくさん知ることができ、日本で学んでいたような歴史や日本からみた中国の文化は私自身が知っていた内容とは少し異なっていたり、意外と似ている部分があったりしました。

私が訪れた都市は、「北京・長春・瀋陽」の三か所です。初日で登った万里の長城は、今までテレビや世界史の教科書に記載されていたものしか見たことがなかったので、実物には圧倒されて、自分が中国の地にあり立ったのだと感じる瞬間でもありました。私が言葉をのんだ建物は紫禁城「故宮」です。故宮は、広大な敷地に宮殿が配置され、皇帝が執務を行った「外朝」、皇帝が生活した「内廷」からなります。東北民俗文化では、魚皮画の制作をし、「福」の文字をいろんなイラストで表現していて、さらには魚の皮を再利用しているため、こんなにも身近にあるものでとても良い作品が生み出されている点に感銘を受けました。吉林大学を訪問した際は、大学院生まで進んでいる方もいらっしゃったりして、日本語をととても流暢に話されていたり、聞き取ったりして会話がスムーズで勉学に励む姿を見習いたいと感じました。

食文化に関して、火鍋に一番興味がありました。今回行った料理店では中国版の「しゃぶしゃぶ」をいただいた際、日本にはない種類豊富な肉類に驚きがあったこと、日本のような葉野菜を組み合わせっていてとても食べやすかった印象がありました。水餃子も種類豊富でどれも日本では味わうことがないので、新鮮でした。本場の北京ダックは、想像以上に美味しかったです。「酢豚」でも、日本と中国で入っている材料に違いがあって、文化や国を越えて、同じ料理でもその国の良さが詰まっていて、料理の奥深さを改めて知りました。麻婆豆腐の香辛料も中国ならではの使い方と美味しい辛さにまた食べたいと感じました。昼食や夕食以外に買って食べたもので時期的に「月餅」を食した際に、癖になる味で本場の月餅と日本の月餅を食べ比べてみたいと思いました。

訪れた都市の「北京・長春・瀋陽」の三か所のホテルは、どこもいいホテルで自分では泊まれないような場所でもあるのでたくさん満喫させていただいて、朝食や昼食、夕食までいただいた際には、日本でも食べるような料理やバイキング形式ですごく目新しいことばかりでした。

今回の日中友好の交流を通して、日本大学生との交流もいかに大事か学びました。私は自分の班でよかったと思っている理由が、ひとりひとり個性があって、誰として一人にしないこと、責任感があって、団結力もどこの班よりも強いと感じています。

これらを踏まえて、日中友好協会の大学生訪中団第3陣に参加して本当に良かったと感じています。

「心の重さと緊張感を抱えて―『九・一八』を前に訪れた中国―」

1-A 慶應義塾大学 鈴木真菜

旅程を見返すと、この訪中はダークツーリズムに見える。戦後 80 年という節目の年、そして 9 月 18 日「国恥の日」の直前というタイムリーな日程の中で、長春・瀋陽という旧満州国エリアの歴史的都市を周り、東北陥落史陳列館、「九・一八」歴史博物館等を見学する。旅程を最初に見たときから、心にずっしりとくる重さと緊張感があった。歴史上の出来事と言えど、日中戦争とそれにまつわる残虐な行為は日本人と中国人の間で起こった悲惨な事実であって、中国の人は呑気な我々日本人学生のことをどう見ているか分からない。また、中国人の中にある憎しみ・恨みは今さら変えようのない歴史的事実から来るものであり、そうした全ての感情を訪中期間で受け止めることになるかもしれない。日本を出発前、このような重さと緊張感を抱えながら荷造りをしたのを覚えている。

さて、ダークツーリズムだと感じた旅程について、実際に行ってみた感想を振り返る。

三日目に訪れた東北陥落史陳列館では、日中戦争にまつわる展示がなされており日本軍の侵略の事実を突きつけられることになった。抗日に湧く時期だから比較的多くの中国人が博物館を訪れており、中には私たち日本からの大所帯を冷たい目で追い撮影する人もいた。展示内容を見るのは少し怖い気持ちもあったが、実際見てみると日本で習った通りの史実が記載されており、反日感情を過度に盛り上げるような記載が一切なかったことに安堵した。しかし第二部に入ると、日本では目にすることのない史実が展示されていた。731 部隊を中心とする細菌戦に関する展示である。細菌戦については日本政府が否定してきたこともあり、日本では日本史の教科書でも世界史の教科書でも全く触れられていない。そのため、細菌戦に関しては今回の博物館で初めて目にする情報がほとんどであった。戦争解釈の難しさと日本人という当事者の集団内で戦争を正しく捉える難しさを実感した。

五日目に訪れた「九・一八」歴史博物館は、一週間の中で最も精神を削られた場所だった。

「九・一八」歴史博物館にバスで近づくと、白い服を着た人々の集団が見えた。博物館の会場内だけでなくバス停や道路まで溢れ出ているほど、たくさんの人が集まっていた。その人達の中心にあるステージに書かれていたのは、「勿忘九一八・・・」。黒地に赤い文字、背景には火の粉の舞う映像が流れ恐怖を感じた。私たちはバスから降りてそそくさと博物館内に向かったのだが、その道中では中国に来てから聞いたことのないほど強い語気の中国語で何かを訴えかける声が耳に入ってきた。博物館では、東北陥落史陳列館と同じく、日本で習った通りの史実が記載されていた。ただその悲惨な事実により圧倒されるとともに、当時の人々の感情に寄り添うような合唱の声に心を削られた。また説明文や写真だけでなく、当時の日本軍の記録や新聞記事、学校で使われていた日誌などの史料が驚くほどたくさん保管されており、この場所が事件の現場であることが伝わった。博物館で現地の人から受けた視線や、「九・一八」歴史博物館を我々が見学する様子を撮影したいという地元テレビ局からの取材依頼があったことを考えると、この期間の日本人への視線は確実に厳しいものであ

ることを実感した。

ダークな戦争関連の博物館は、私的な旅行では訪れない分、とても勉強になったし今後も印象深い思い出として残ると思う。「歴史は過去の憎しみを引き継ぐためにあるのではなく、より良い未来を築くためにある」として過去と現実、未来を切り離して考えている中国人も、反日感情を抱いている中国人も両者存在するということ、そして戦争解釈の難しさ、当事者の日本人として歴史に向き合うことの難しさを学んだ。

しかし実際の旅は、ダークツーリズム的なものだけではない。むしろ温かい思い出として何度も写真を見返して心に大事にしまっておきたいような人との出会いに溢れていた。特に吉林大学や遼寧大学を訪問した際には、学生は、我々と同じくつたない英語で意思疎通を図ってくれたり、サンリオのキャラクターを見て一瞬で笑顔を見せてくれたり、受験戦争の話を熱量込めて話してくれたりした。このような一対一の交流では、日本人と中国人という枠組みを抜きに素敵な思い出を作ることができた。テレビを見ているだけでは想像もできなかったこの出会いは、今後も海外の人と関わるうえで大切な経験になるだろう。

最後に、日中友好協会、中国人民对外友好協会、中国日本友好協会の皆様、このような貴重な機会を下さりありがとうございました。とりわけ 1 号車で私たちを温かく見守ってくださった郭寧さん、団長パパ、前田ママ、劉雲さんにも心より感謝申し上げます。皆様のご尽力のお陰で、安心して 1 週間を全力で楽しむことができました。また、個性豊かで優しくて面白い 1-A のメンバーと出会えたことも心から嬉しく思っています。ありがとうございました！

「訪中を通じて深めた文化理解と友情」

1A 高知県立大学 高橋愛理

今回の訪中国での旅は、一生忘れることのできない、非常に充実した一週間でした。中国に強い関心を持つきっかけになっただけでなく、かけがえのない仲間と出会えた旅でもありました。

私は大学で留学生から中国語や中国文化について教えてもらう機会があり、その影響で中国に行ってみたいという思いが芽生えました。しかし一方で、中国に対して「マナーが悪い人が多い」「よく分からないから怖い」といった偏見を持っていました。そうした偏見は私自身の中国に関する情報源が主に日本の SNS やメディアという偏ったものであったことに起因しています。

今回の訪中は、九月上旬という時期や終戦から 80 年という節目の年にあたることもあり、非常にセンシティブなタイミングでの渡航となりました。私は高校では地理を選択し学習していたため、歴史に関する知識は中学レベルで止まっていたため、九・一八事件についても名前と概要は知っていたものの、詳しい内容は理解していませんでした。今回の訪中では、自身が知らなかった日本と中国の歴史やその関係性に目を向ける貴重な経験となりました。記念館の見学を通じて、戦争の悲惨さや中国側から見た日本の立場について学びました。過去の戦争などの記録を見て学ぶことは、平和を維持するために双方が理解しあうことの大切さを教えてくれるものでした。

また、現地の学生との交流に加えて、日本人同士の交流も文化理解を深めるうえで重要であることに気づきました。事前研修会や現地での活動を通して、「中国文化が好き」「中国語を学習している」といった学生たちに出会い、彼らから中国やその文化について教えてもらうことで、私自身もそれらに関心を持ち、魅力を感じるようになりました。そして、得た知識をもとに他の訪問先を新たな視点から見ることができ、さらなる理解へとつながっていました。

このような経験を通じて、「文化を理解する」とは単に文化を体験したり現地の学生と交流したりするだけではなく、相手の文化に興味を持ち、自身の知識を活用して理解しようとする姿勢が重要なのだと考えるようになりました。そして、そうした興味を持つきっかけは、その文化に魅力を感じている人から直接話を聞くことで、その人の熱量に触れ、より深くその文化の魅力を感じ取ることができるのだと考えました。

この旅で出会った仲間は、私にとってかけがえのない友人となりました。事前研修では全国各地から集まった学部・学年も異なる学生たちと、一週間寝食を共にするということで、不安も大きかったです。しかし、中国という異国の地で、母国語ではない中国語が飛び交う環境に身を置いたことで、自然と協力し合う関係が築かれました。異なる背景を持つ仲間たちと同じ場所を訪れても、それぞれが着目するポイントや感じ方が異なることで、多様な視点から文化を捉えることができました。個人旅行では得られないような深い学びと文化理解が得られたのはこのような仲間と共に旅をしたからこそだと思います。

今回の訪中を通して、私はそれまで持っていた偏見や知識の限界に気づき、自分の目で見て、耳で聞き、心で感じることの大切さを学びました。そして文化を理解するとは、ただ表面的に体験することではなく、相手の背景や歴史、価値観に対して関心を持ち、深く知ろうとする姿勢が必要だということを実感しました。また、この旅で出会った仲間たちとの交流は、文化理解をさらに豊かなものにしてくれました。異なる視点を持つ仲間とともに時間を

過ごす中で、多様な考え方に触れることができ、自分自身の視野も広がりました。この訪中団での貴重な経験や学び、出会いを糧に、今後も異文化への理解を深め、多様な価値観を尊重しながら行動できる人間でありたいと強く感じています。

「食文化」と「歴史理解」についての学び

1A 東北大学 東崎爽

今回の訪中では、北京と長春、そして瀋陽に訪れ、吉林大学と遼寧大学の学生と交流した。毎日の食事では本格的な中華料理を味わい、博物館では中国から見た歴史や文化について学んだ。これらの貴重な体験の中で、非常に多くの学びを得ることができた。

私は今回の訪中に参加するにあたり、中国の食文化の直接的な体験を、自分の夢である「食の世界を面白くする」という目標に近づくための糧にしたいと考えていた。そのため、各地での食事は私にとって特に楽しみにしていた部分であり、実際に多彩な料理を味わう中で、中国の食文化の奥深さと地域ごとの個性を強く感じることもできた。初日の夕食から始まり、刀削麺、火鍋、湖南料理、広東料理と続き、さらには大学の学食まで体験することができた。特に印象に残ったのは、三日目に食べた火鍋である。貝のだしが際立つスープとラム肉から食べたことのないキノコ類まで多彩な具材を自分の好みで組み合わせる食文化には、中国人が食卓を「交流の場」として大切にしている姿勢が現れているように思えた。また、湖南料理では、北京料理が融合した創作料理に近いものが出された。そのため、強い香辛料の効いた味付けに苦戦するかと思われたが、辛みは少なく食べやすかった。食べる人によって各地域の料理を混ぜたりアレンジしたり、柔軟に食を楽しむ中国の食文化を感じた。さらに、遼寧大学の学食では、学生たちが日常的に口にしている素朴な料理に触れることができ、庶民的な食文化の一端を垣間見ることができた。これらの経験は、単なる「味覚体験」にとどまらず、料理が人々の暮らしや価値観と結びついていることを実感する機会となった。

一方で、訪中の中で強く印象に残ったのは、中国の近代史に触れたことである。特に、長春で訪れた「東北陥落陳列館」や瀋陽の「九一八歴史博物館」では、日本ではあまり詳しく学ぶことのない視点からの歴史展示を見ることができた。九一八事件については、日本では「満州事変」として習うことが多いが、中国では「中国を政治的、経済的など多くの面で支配し、抗日戦争の起点であり世界の反ファシズム戦争の幕開けを告げた侵略」として語られていた。展示の中で、当時の新聞記事や被害者の写真を目の当たりにしたとき、歴史を「加害者側」と「被害者側」の両方から学ぶことの重要性を痛感した。

私はこれまで、日本で教育を受ける中で歴史を学んできたが、その多くは日本の立場から整理されたものである。しかし今回、中国からの視点に直接触れることで、同じ出来事でも国によって語られ方が大きく異なることを体感した。そして、その差異をどう受け止めるかが、これから国際的に働く上で不可欠な姿勢だと感じた。特に食品業界に携わる上では、異なる文化や歴史を背景に持つ人々と協働する機会が多くある。もし歴史や価値観の違いを理解しようとせず、自国の常識だけで判断してしまえば、誤解や摩擦を生む可能性が高いだろう。その意味で、中国の歴史博物館で得た学びは、将来グローバルに働く自分にとってかけがえのない経験となった。

今回の経験を振り返ると、「食文化」と「歴史理解」という二つの軸で大きな学びを得たと言える。食文化については、味覚だけでなく、地域や生活との結びつきを体験することで、

自分の夢である「食の世界を面白くする」という目標に具体性が加わった。歴史理解については、一面的な情報にとどまらず、多角的に物事を捉える姿勢の重要性を再確認した。将来、私は食品業界で国際的に働きたいと考えている。そのとき、この訪中団で得た食文化の知識や歴史観への理解は、必ずや自分を支える基盤になるだろう。そして、この経験を糧にして、国境を越えて人々をつなぐ「食の可能性」をさらに広げていきたい。

「日中友好に祈りを込めて」

1A 日本大学 富板大揮

「次の日中関係を担うのは君たちの世代である」－団長である安藤公一様から事前研修の際と北京での歓迎会の際にいただいたお言葉である。この言葉の通りこれからは私たち若者世代が日中関係のみならず世界の平和と友好を担う立場になることを強く意識しなければならない。今回は、そんなことを考える非常に良いきっかけになったと思う。

日中関係を考えるうえで、絶対に欠かせないことはお互いの国を知ることだ。ここでの「知る」ということは、ただただ世論やインターネットで得た情報だけで、知ったかぶりをするのではなく、中国を訪れ、歴史を学び、現地の民と交流することを基盤とした正しい理解をすることである。

訪中前、日本における中国のイメージを家族に聞いてみたが、マイナスなイメージが多かった。そして、インターネットでも検索してみたが、あまり良い印象の記事が見当たらない。それでも私は、世論に流されるのではなく自身の目で確かめてみたいと思い、今回の訪中国に志願した。結果として、素晴らしい中国の伝統文化や日中関係の影の歴史にも目をあてることができたのである。

例えば、印象的なセッションとして、「九・一八歴史博物館」の見学があった。日本国においては、主に太平洋戦争、つまりは対米戦争の方にフォーカスして、学校やテレビなどで取り扱うため中国で旧日本軍がなにを行っていたのかは、恥ずかしながらこの年まで詳しく知らなかった。

しかしながら実際に、行われた侵略や戦いの歴史を写真とともに学習することで、より深い理解と共に、強く日中恒久平和への思いが強まったのである。

それでは、どのように日中平和そして、友好へとつなぐことができるのであろうか。よく政治家などは「外交上の努力や最善を尽くす」と立場上言葉を濁すが、私は、一つ大きなヒントを見つけた。

「対話」である。相手と「対話」することによって、相手の考え方や思考、そこに至る背景や文化を学ぶことができるのである。先の戦争では、日本は中国と「対話」しようとせず、武力によって、統治しようとした。しかしながらそれは、一番コストがかかるうえに、長く続かないのである。

最も有効で、長く続く交流は「対話」による交流である。そして、それによって、できた絆は強く近い将来必ずや友好の種となり得るのではないかと考えたのである。

これは必ずしも政治家や官僚たちだけが行うことではない、私たちのような民衆が個々に行うことが大切なのである。また交流のポイントとして、無自覚の偏見や思い込みを捨てることである。今回、2つの大学の学生さんたちと交流を行ったが、素直に相手の話を聞き自身も発言することによって、お互いに心を開きより良い交流への第一歩が開けると感じたのである。

そうすれば、必ずや私たちの世代からでも日中関係は新しいステージに入っていくだろう。

日本も中国もアジアの中で、非常に大きな経済発展を遂げ、アジアの大国となった。他のアジア諸国に背中を見せリードしていかなければならない立場である。その二国が手を取り合って、さらなる経済発展や文化交流を行うことによって、私たちのみならず世界にとってもよい影響が出るのである。

「いがみあい」ではなく「親しみ合い」の心をもって、「対話」していきたいものである。

また今回は、班員のメンバーにも非常に恵まれた訪中であつた。事前研修の際にも「日中交流」の前に「日日交流」を促進せよ、とった訓示があつたが、まさにそれを体現するように、非常に仲良く、お互いを高め合える交流ができたと感じている。志高い仲間たちと交流することができたことを心から感謝するとともに彼らから学んだことを大学生活で活かしていかなければならない。

今回の訪中を通じて、日本と中国の未来に明るいものが見えたと思う。まだまだ日本にも課題が多いと思うが、私たちの世代を中心に交流を促進していく心構えを共有できたことは、非常に大きな収穫であつた。SNS が普及し、様々な主張や情報が跋扈する現代において、「逆転しないもの」を見つけるためには、やはり自身の目で確かめるしかない。今後も日本と中国に着目しながら学び続けていきたい。

最後に、訪中団の団長である、安藤公一様や前田知子様、また中国側の郭寧様、ガイドの劉雲様をはじめ随行していただいたすべての方に心より感謝申し上げるとともにこの学びを今後に生かすことを誓う。

「更なる成長」

1A 中京大学 西畑有真

今回の訪中を通して、私は歴史や文化について深く学び、多くの貴重な経験を得ることができました。特に抗日戦争や 9.18 事件、満州事変といった歴史に触れる中で、戦争の悲惨さを改めて実感し、決して同じ過ちを繰り返してはならないという強い思いを抱きました。教科書や映像で学んだ知識はありましたが、実際に現地で資料や証言に触れることで、戦争が人々の生活や命をどれほど奪い、心に深い傷を残したのかを、より現実的に理解することができました。犠牲となった人々の想いを思うと胸が締め付けられるようであり、平和の尊さを噛みしめました。

また、歴史を学ぶだけでなく、中国が誇る世界遺産を訪れることもできました。万里の長城は、その壮大さに圧倒され、かつて防衛のために築かれた人々の努力と叡智を肌で感じることができました。険しい山々に果てしなく続くその姿は、人間の力の偉大さを物語ると同時に、長い歴史を経てなお存在し続ける文化遺産の重みを実感させてくれました。紫禁城では、かつての皇帝が暮らした壮麗な建築や繊細な装飾に触れ、中国文化の奥深さを感じました。その一方で、こうした権力の象徴が歴史の移り変わりとともに役割を変え、現在は人々に開かれた文化財として残されていることに、歴史の流れの大きさを考えさせられました。

さらに、現地の大学生との交流も大変有意義なものでした。互いの国について語り合い、日常生活や学びの姿勢を共有する中で、国と国との生活の仕方の違いや生活に対する考え方を学ぶことができました。例えば、彼らは勉学を中心に据えながらも、自国の文化や社会に誇りをもち、将来に対して明確な目標を抱いていました。その姿勢は私に強い刺激を与え、自分自身の学びへの姿勢を見直す契機となりました。交流の場は笑顔と活気に満ちており、言葉や文化の違いを越えて心が通じ合う瞬間を体験できたことは、忘れがたい思い出となりました。さらに印象的だったのは、最後に SNS を交換し、今後も互いに連絡を取り合える関係を築けたことです。昔であれば国境を越えた交流は一度限りのものになりがちでしたが、現代では技術の進歩によって距離を超えてつながりを保つことができます。いつでも彼らと会話ができるという安心感は、国際交流の新たな可能性を強く感じさせました。

加えて、伝統芸能や文化体験を通じて、中国の豊かな文化の息吹を実感しました。舞踊や音楽のしなやかで力強い表現には、歴史を背負った民族の誇りが込められており、見る者の心を揺さぶりました。書道体験では、一つひとつの筆の動きに精神を集中させることで、文字に魂を込めるという中国文化特有の美意識を体感しました。また、工芸品づくりでは細部まで丁寧に仕上げる職人の精神に触れ、文化が単なる形ではなく、人々の心と結びついていることを理解しました。これらの体験を通して、文化は過去から受け継がれ、現在に生きる人々によってさらに豊かに育まれているのだと実感しました。観光として「見る」だけではなく、自らの手や感覚で「体験する」ことで得られる学びは非常に大きかったです。

今回の訪中を振り返ると、歴史を学び、文化に触れ、現地の人々と交流することで、多角

的に中国を理解できたと感じます。そして何より、戦争の悲惨さと平和の大切さを深く心に刻むことができました。国と国との間には時に困難な歴史や課題が存在しますが、未来を担う私たちが互いを理解し、尊重し合うことこそが、平和を築く第一歩であると強く思います。今回の経験を今後の学びや行動に活かし、平和で友好な国際社会の実現に少しでも貢献していきたいと考えています。

「日中の歴史と未来について」

1A 横浜国立大学ハミード太郎

今回、私は日本中国友好協会の 2025 年日中友好大学生訪中団第 3 陣として北京、長春、瀋陽の三都市を訪れさせていただきました。私がこのプログラムに参加させていただいた動機は、主に二つあります。一つ目は 2025 年訪中団第 1 弾に参加していた同大学の友人の強い勧めからです。彼は中国の建築、食事、文化、人々の魅力、電子決済、e コマース、高速通信網などデジタルインフラの発展のすごさを力説してくれました。私は、専攻が数学とプログラミングであり、特にプログラミングに興味を持っているため、中国ではどれほどデジタルインフラが発展しているのだろうと中国に関心を持ち始めました。私は建築には疎いため中国の建築の良さを深く理解できるとは思いませんでしたが、食事、文化、人々の魅力、デジタルインフラの発展具合を自分の五感をフル活用して感じたいと思ったのが一つの理由です。そして、二つ目の理由が親族に中国は怖い国なのだから、あまり関わらないほうがいいといわれたのが悔しかったからです。私は一度だけトランジットで中国の昆明に 23 時間だけ滞在したことがありました。この時に感じたのは、私たちが困っているときに現地の方から話しかけてくれ、言語が通じない中、翻訳、漢字、時には身振り手振りを用いて助けてくれた純粋な優しさ、マーケットの活気、食事のおいしさです。しかし、この短い滞在だけでは、親族に中国の良さを理解してもらうには強い材料とはなりません。そのため、今回の中国での滞在で、たくさんの方に中国の良さを知ってもらう材料を探したいと思ったのが二つ目の理由です。

以上、二つの動機を持ち訪中をさせて頂きました。まず、今回の旅では電子決済や e コマースを利用する機会が少なかったため、想像を超えるようなデジタルインフラの発展を感じることができませんでした。しかし、今回の今後の人生に良い影響を与える貴重な体験ができました。訪中では始めに、政治、文化などの中心である北京で政治、文化について体感してきました。まず約 2200 年前の秦の時代に統合された中国北方の遊牧民の侵入を抑えるために建てられた万里の長城を上ってきました。そこではどんなに標高の高い場所、急な崖のような斜面にも今まで残る城を 2200 年前に築き上げたこと、そして 21196km という日本列島の約 3000km という長さをはるかに上回る長さを作り上げた中国の広大さ、忍耐強さ、技術の凄さを感じ取ることができました。また、反ファシズム戦争勝利 80 周年を記念した中国共産党歴史展覧会を訪れ、かつての日本を含む反ファシズム国家に勝ち、どのように中国共産党が成立したかを学んできました。そして、長春、瀋陽ではかつての満州国の一部であった都市であるため、満州国の歴史について主に学んできました。満州国が建国される一つの要因となった南満州鉄道線路が爆破された 9/18 付近に訪れる日程であったため非常に行くことに恐怖を感じていましたが、その期間でしか感じることでできない中国の方の真の感情を体感することができました。そこでは被害を与えた日本とは違う、被害を受けた側の視点からどのように満州国の歴史について感じているのかを学びました。日本の教育では学ばなかった、日本が戦時中にジュネーブ議定書において戦時中に利用を禁止されていた生物兵器の使用をしていた事実、そしてその事実を消滅させようとしていたことを知りました。他にも様々な日本では教えられていない史実を学ぶことができました。歴史や文化以外に食事のおいしさや人々の人柄の良さを感ずることが、料亭や中国の大学生との交流を通じて理解することができました。

以上のことより、今回の訪中では様々な人に中国の良さを共有できる様々なことを体験できました。また、中国の文化、中国と日本の間での戦争における理解をすることができました。これらのことを理解するということは今後どんどん成長していく中国の方と、私が働きに出たときにコミュニケーションをとるときにリスペクトという意味、歴史の話になったときにも理解をしているという意味で今回は非常に僕の未来によい影響を及ぼしてくれるなと感じました。

最後に、この機会をくださった日中友好協会、中日友好協会の皆様、私たちを様々な面でサポートしてくださった方々に深くお礼申し上げます。

「万里の長城よりも高い、成長の壁を越えて」

1A 山形大学 藤井希沙蘭

私は 2025 年に開催された日中友好協会青年代表団に参加する機会を得ました。このプログラムで、私は初めて飛行機に乗り、海外での異文化体験をする貴重な機会となりました。正直なところ、初めは不安や緊張で胸がいっぱいでしたが、1-A 班の仲間たちと共に過ごす中でその不安は次第に解消され、社会や自分自身の向き合い方を理解し、考え方が広がったように感じています。この旅行を通じて、中国の歴史や文化を学ぶとともに、自分自身の成長を実感し、感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の訪問先は北京、長春、瀋陽でした。まず印象に残ったのは、初日に訪れた万里の長城です。長城の登頂は、予想以上に過酷でした。場所によって段差が異なり、足が震える場面もありましたが、一生懸命に登りきった後に見た景色は、私のこれまでの人生で最も感動的な瞬間の 1 つでした。壮大な景色に、歴史の重みを感じるとともに、長城が中国の誇りであり、誇大に描かれることなく現地の人々の生活に密接に結びついていたことを実感しました。また、登った後に食べたアイスクリームの味は格別で、日本にはない味と食感にもう 1 度食べたいと思うほど恋しくなっています。

次に訪れたのは中国共産党歴史展覽館です。ここでは、日本で学んできた歴史と中国側が伝えている歴史の違いを知ることができ、非常に貴重な経験をする事ができたと思います。歴史の観点から見ると、異なる視点を持つことで物事を多角的に考える重要性について学ぶことができました。そして、故宮見学ではその壮麗さに圧倒され、入口から息を飲み込みました。故宮内で食べたマンゴーミルクアイスは、月餅のような美しい絵柄が印象的で、日本では味わったことがない美味しさでした。

吉林大学では、現地の学生たちと交流を通して中国について学びを深めました。彼らと MBTI や中国のおすすめの料理やお菓子の話で盛り上がり、異文化交流の楽しさを実感しました。お土産として、日本から持参したお気に入りのお菓子を彼らに渡した際の喜びようを見て、交流の大切さを改めて感じました。彼らの温かさや友好的な態度に触れることができ、私もこれからもっと積極的に異文化に触れて学びを得ようと決意しました。

また、長春世界彫刻公園では、一本の木を連ねて彫刻した像や、700 枚を超える絵が圧巻でした。彫刻の細部に至るまで、精巧さと芸術の美しさを感じることができ、芸術に対する視野や価値観が変わりました。老北市伝統市場では、中国の伝統的な市場文化に触れ、色とりどりの製品が並ぶその賑やかな雰囲気を楽しむことができました。そこで食べた「老冰棍」という昔ながらのアイスは、中国の風味を味わいながら、地元の文化に溶け込むことができた特別な瞬間でした。アイスだけに。笑

その後、訪れた「9・18」歴史博物館では、私たちが日本で学んだ歴史とは異なる視点から、中国東北地方に対する日本の行動を学びました。歴史を学ぶことは、過去の過ちを繰り返さないために重要であり、これからもその教訓を心に留めておかねばならないと強く感じました。

最後に、バスの中でのカラオケ大会やイントロクイズ、トランプで盛り上がりながら過ごした移動時間は、何気ない瞬間ですが、全て宝物のような時間でした。大学交流時に披露した愛あり、笑いあり、ハプニングありの出し物や、美味しい中華料理をたらふく食べて体重増加待ったなしの日々を送ったあの7日間は私にとって万物とも代えられない大切な大切な思い出です。

この7日間の旅を終え、私は自分の人生において最も大きな成長を感じています。この経験が、私にとって人生の大きな分岐点となり、これからの未来に大きな影響を与えることは間違いありません。最初に緊張していた私を優しく励まし、支えてくれた1-A班の仲間たち、そして私の緊張をほぐし背中を押してくださった程先生に深く感謝しています。そして今回の訪中団中に郭さんがおっしゃっていた「心のある付き合いを、心のある人生を」というお言葉は、私の意識を変える1つのきっかけになりました。今後も友好の精神を大切にし、自分自身の成長に努め、将来に向けて邁進していきたいと強く感じています。

今回の訪問は単なる観光旅行ではなく、私にとって学びと成長の旅であり、未来に向けた一歩を踏み出す勇気をくれた貴重な経験でした。全ての出会いに感謝する気持ちと共に、この体験を将来の友好の架け橋になるように繋げて行きます。

「訪中が変えた視界」

1 A 法政大学 正木善也

自分が思い描いていた中国と現実の中国には必ず差異があると予想し、一次情報を獲得するため訪中団に参加した。1 週間の滞在を経て、中国へのイメージは大きく揺さぶられ、多角的に変化した。

第一に環境問題について。報道やメディアを通して抱いていた印象は、中国は膨大な CO2 を排出し、大気汚染を悪化させている張本人であるというものだった。実際に都市の空は霞み遠くの景色が見えにくいと感じ、帰国直後に日本の空気の清浄さに驚かされたことも事実である。しかし街を歩くと、予想以上に多くの電気自動車が走っており、ナンバープレートの色で EV かどうかを識別できる仕組みがあることも知った。体感的には約 6~7 割が緑色（電気自動車）のプレートで、街全体の環境意識の高さを身をもって感じた。また、その横を無数のレンタル自転車が駆け抜ける様子も印象的だった。特に北京・長春・瀋陽といった都市部ではシェアサイクルが日常生活に深く根付いており、大気汚染大国と揶揄される中国からも学ぶべき点が多いと感じた。

第二に人について。これまでに海外で中国人と出会う際、彼らは少し無礼で騒がしいと感じてしまう場面があったが、今回の滞在中にそう感じることは一度もなかった。国外に出るのは富裕層が多く、中国内では貧富の差が大きいと聞いたことがあったが、実際に国内で暮らす人々に接することでしか得られない理解があると気づかされた。また、遼寧省での日本人殺害事件や、訪中期間が 9 月 2 日の抗日戦勝記念日と 9 月 18 日の満州事変開始日の狭間であったことから、反日感情の高まりに不安を覚えていた。実際「九・一八」歴史博物館や中国共産党歴史展覧会、東北陥落史陳列館を巡る中で、中国における対日本の歴史認識を強烈に突きつけられた。しかし、街で接した人々から敵意を向けられることはほとんどなく、嫌な思いをした記憶はない。歴史という暗い過去が彼らの反日感情の背景にあることは否めないが、それを直接体験していない世代の我々にとって過去を学ぶ権利はあり、日中友好の可能性は無限に広がっていると実感した。

最後に、食について記しこの報告書を締め括りたい。7 日間 1 日 3 食の豪勢な食卓を通し、食の面から中国文化を感じることができた。この訪中期間に感じた最も大きなギャップが中華料理かもしれない。例えば、日本と比べ餃子は随分と分厚い。また、大抵の日本人が中華と聞いて想像するであろうエビチリや油淋鶏といったものは目にすることがなく、初めて目にする料理が多かった。22 年間の人生で未体験の味に出会え、本物の中華を知った今は横浜中華街での味の比較を待ち望んでいる。このようにして中国の本当の姿を五感で吸収する中、テーブルを回し同じ世代の班員と箸を伸ばした瞬間に中国人が経験してきた日常を感じ取れた気がした。今回中国での滞在時間を共有した班員の皆とは、今後も食事を囲む機会を設け、中国を訪問した私たちだからこそできることを考え続けていきたい。

「日中友好がもたらすもの」

1A 津田塾大学 溝口彩苗

今回の訪中国は、私にとって「中国を知る旅」であると同時に、「自分を知る旅」でもありました。出発前、抗日戦争勝利 80 年の節目であることから、家族や友人からは「気を付けてね」と心配され、私自身も少し緊張していました。また、ニュースや SNS で目にする中国は、どこか遠くて、時には怖い存在のように思えることもありました。しかし、中国で過ごした 1 週間で、ポジティブな印象も持つようになりました。特に、人の温かさ、サービス精神、活気を非常に感じました。この 3 つは、実際に現地に訪れなければ感じられないことだと思います。一番印象に残っているのは万里の長城です。急な坂を息を切らして登った先で、果てしなく続く石の階段が目の前に広がったとき、思わず言葉を失いました。「こんなものを人の力でつくったのか」と鳥肌が立ち、歴史のスケールに圧倒されるとは、まさにこのことだと実感しました。

さらに、今回の旅では、中国の「過去」と「今」と「未来」を立体的に感じました。近代史を伝える博物館では、日本が関わった歴史を中国の人々の視点から学び、日本では強調されていない歴史を知り、胸が詰まるような気持ちになりました。しかし、その後に出会った同世代の中国人学生は、私たちと同じように未来の夢を語り、好きなアニメや音楽で盛り上がる普通の若者でした。過去を学びながらも、目の前の相手と笑い合えることが「次の世代の友好」の第一歩なのだと感じました。

そして忘れられないのが食文化です。どの都市でも料理は驚くほどおいしく、テーブルいっぱいには並んだ色鮮やかな料理を見るたびに元気が出ました。辛い料理、酸味の効いた料理、中国式のしゃぶしゃぶまで、どれも新鮮で、食事の時間が毎日の楽しみでした。出発前は「お腹を壊さないかな」と少し不安でしたが、衛生面はとても整っていて、一度も体調を崩すことなく過ごすことができました。食事を通して中国の文化を味わい、仲間や現地の方々と円卓を囲んで、笑い合った時間は、旅の中でも特に幸せな瞬間でした。

さらに、この旅で大きかったのは、同じ班の 14 人との出会いです。どんなことが好きで、嫌いで、何に興味があるのか、何を経験してきたのか、全てが異なる 14 の価値観を知ることができました。話を聞いたことで、「大学生のうちに何をすべきか」を真剣に考えるきっかけにもなり、自分の進みたい方向を見直す時間になりました。私は今回、「知ることの力」を実感しました。ニュースだけを見ていたら抱かなかったであろう気持ちや、現地で人と話し、風を感じ、料理を味わい、歴史の重さを肌で知ることによって芽生えました。これからも中国語を学び、今回出会った仲間たちや現地の学生たちとのつながりを大切にしながら、日中の橋渡しができる人間になりたいと思います。

この旅は、単なる研修旅行ではなく、私の中の「世界の見え方」を変えてくれた一週間でした。与えられたこの機会を無駄にせず、次は私が誰かに中国の魅力を伝える番だと思っています。